東方友人記

バリカタ愛好者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方友人記

【Ｎコード】
Ｎ０６１７Ｘ

【作者名】
バリカタ愛好者

【あらすじ】
この物語は『作者とその友人が幻想入りしたらどうなるのか。』という、くだらない妄想を実際に文章にしてみた駄文です。

一応言っておきますが、この小説は東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作であり、上海アリス幻楽団とは何の関わりもありません。
以下のことについて気をつけてください。
・厨二病要素やチートがあるかもしれません
・駄文、訳が分からない文

・原作崩壊
・気まぐれ更新

以上のことに関して、
『いいんじゃね？』という物好きの人だけ読んでください。

感想やご指摘をしてもらえるとありがたいです。

では、あとはゆっくりと読んでいってください。

第一話　うちわで扇いでる奴の目の前で堂々とアイスを食ってみたい。（前書き

第一話って何でこんなにも汚く書いてしまうのだろう・・・・・・。

見る際はある程度、優しい目で見てください。

第一話　うちわで扇いでる奴の目の前で堂々とアイスを食ってみたい。

ここはとある学校。夏の暑さと前日に降った雨のおかげでジメジメした教室の中で授業が行われていた。

ある生徒はうちわを使い、
ある生徒は下敷きを使い、
ある生徒はノートや教科書を使い、
ある生徒は諦めて授業に集中し、
それぞれ授業を受けていた。

だが、その中でたった一人だけ授業を聞いていない人がいた。

そいつの名前は『白河昇（しらかわしょう）』
彼は窓際の列の一番後ろの席で気持ち良さそうに寝ていた。
もちろん、風など皆無である。

先生はそんな彼を見て「よく眠れるな」と思いながら授業をしていた。

その時、

キーンコーンカーンコーン

授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。
その音でほとんどの生徒が安堵の表情を見せた。
そんな生徒達に先生は
「よし、今日はここまで。今日やった所は明日テストするから復習しておくように。あと今日は担任が出張なので帰りのホームルームは無しだ。」
と言い残し、教室を去った。
生徒達はトイレに行ったり、水分を補給したり、荷物をまとめたりして各々過ごす中で、昇の席には既に彼の姿はなかった。
そんな席に残されていたのは、今日授業中に配られていたプリントとそれにしっかりと染み込んだヨダレだけだった。

場所は変わってここはとある部室。
部屋の中には会議に使われるようなでかい机が一つあり、その上には様々なジャンルの物が置いてある。

デスクトップパソコン、
ライトノベル、
携帯ゲーム機、
漫画、
ＣＤとラジカセなどなど・・・・・・。
そんな部室の扉が開いた。

「よっしゃ！！今日も授業が終わったーーーーーーーーーー！！」

さっきまで寝ていたとは思えないテンションで昇は叫んだ。

「うるせえよ、少しは自重しろよ～白河。」
「どんなテンションだ。一回死ぬべき。」
「先生にあとで怒られるのが嫌だったら、自重すべき。」
そんな昇に冷静にツッコミを入れつつさらに三人、昇に続いて部室に入ってくる。
四人はそれぞれ机に用意されているパイプ椅子の横に荷物を置くと椅子に座った。
全員が座ったところで、昇が背もたれに体重を預けながら言った。

「さて・・・・・皆さん、今日は何をします？」

すると、一人が手を上げる。

「はい、井上（いのうえ）。」
井上はドヤ顔をしながら言う。

「今日はだるいからかえｒ「もういい、お前はだまってろ。」・・・・・冗談だぜ・・・。」
井上が若干笑いながら手を下げると別の男子が手を上げる。
「はい、巌(いわお)。」
巌はにやけながら言う。

「なら、デュエルしな「却下。」・・・・・チッ・・・・・。」
巌が昇をにらみながら手を下げると最後の男子が手を上げる。
「はい、浅野(あさの)。」
浅野と呼ばれた男子は満面の笑みで言う。

「じゃあ、読書しｙ「論外だ。」・・・・・・ですよね～～。」
浅野はやっぱりなという顔をしながら手を下げる。
そこで、呆れたように昇がしゃべり始める。

「君たちは今日の活動もろくに決められないのかい？君たちには失望したよ。だが、君たちには何の罪も無い。君たちに聞いた俺が悪いんだから。だから君たちは何も悔やむ必要も無い。だから私は考えた。君たちの代わりに今日の活動を考えた。そして出た結果は・・・・・。」

昇は一度言葉を切ると最後にこう言った。

「みんなで『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』について話合わないか？」

一瞬部室が静かになった。

昇以外の三人はお互いの顔を見合うと口パクで「せ～の」と合わせて言った。

「「「だが、断る！！」」」

「何故だあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

ここはとある部活。
普通の高校生が集まってわいわいやるだけの部活。
全員に共通することは、
『オタク』ということ。
そして、『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』に興味があるということ。

それゆえにこの部活の名前は「ＳＴＧオタク部」
別名『東方バカ部』。
物語は東方好きのメンバーを中心に進行して行く・・・・・・・・。

第一話　うちわで扇いでる奴の目の前で堂々とアイスを食ってみたい。（後書き

どうも、初めまして。
初めましてじゃない人はこんにちわ。
バリカタ愛好者です。

作者的には二作目となるこの『東方友人記』ですが、
きっかけは友人との会話で『もし、お前と俺が幻想入りしたら面白くね？ｗｗ』という何気ない会話から書こうと思い書いた作品です。
なので、ほとんどその場のテンションで書いていることが多いです。

しかも、一作目も終わっていないので、どうしても更新が遅くなってしまいます。
ですが、それでも力の限り頑張っていくのでどうか応援宜しくお願いします！！

第2話　リア充って、日常生活を楽しく生きている奴のことを言うんじゃないの

作者「ヨッシャ！！やっと出来たぜ！！」

昇「会話文多くね？」

作者「それは言うな。」

第二話をどうぞ。

第2話　リア充って、日常生活を楽しく生きている奴のことを言うんじゃないの

「くそ・・・・何故だ・・・何故お前らは部長である俺の言うことを聞かない・・・・・。」

俺は机をガンガンと叩きながら、机に顔を突っ伏していた。

「当たり前だろ。」

と浅野は机の上にあったライトノベルを手に取ると読み始めた。

浅野は自分の興味ないことは本当に無関心だよね。

すると、巌が浅野の言葉に続くように話す。

「そもそも、お前が部長らしいことをしたことがあるんですかね？いつも部室に来てはダラダラして、部員に指示も出さずに自分だけ勝手に何かをしている。さらに、この間は部長会議に出席するのを忘れて危うく部費が出なくなりそうだったんだよな？さらに最近だと引退する先輩たちの花束を買うのを忘れる始末。そんな奴が部長だと言えるんですかね？どうなんですかね？」

巌は相変わらず相手の心を確実に突いてくるよなあ・・・。

全部実際にあった事だから何も言えないんだけどさ、ちょっと言い過ぎじゃない？俺、泣きそうになってきたよ・・・・・・。

すると、井上がまあまあと言いながら話しに入ってくる。

「巌の言うことも分かるけど、俺は昇が部長だと思っているよ。」

井上・・・・・！お前だけは俺の味方をしてくれるのか・・・・・。

「確かに昇は部長を一生懸命にやっているように見えない（・・・・

）けど、きっとそれが昇の一生懸命なんだよ！きっと！」
なあ？と言っているような顔でこちらを見てきたが、そのとき俺は
「・・・・・えぐ・・・えぐ・・・」
泣いていた。結構マジで。
「ど、どうしたんだよ！？そんなに辛かったのか？おい！お前らのせいで昇が泣いてるぞ！どうするんだよ！！」

井上・・・・・お前は良い奴だが、肝心なことに気がつかないところはいつも通りか・・・・。優しいのは良いんだが、時としてその優しさが人を傷つけることを覚えてくれ・・・・・。

「ああ！！うるさい！！これでも飲んでおけ！」
そう言って浅野がカバンから出したのは学校の中で買える紙パックのイチゴ牛乳、
それをこちらに差し出してきたので、とりあえず泣き止んでありがたくもらった。
「本当に毎回思うんだが、イチゴ牛乳で泣き止むって小学生かよ。」
と井上。
「いいだろ、イチゴ牛乳好きなんだから。」
チューチューと飲みながら、井上と話していると、
「ああ、それを飲み終わったらコーヒー牛乳を買ってきて。」
「はいはい・・・・・ってはあ！？」
そんな声を出すと浅野は何？みたいな顔をして
「だって、部長でしょ？部長ならそのくらいできますよね？」
「部長だからってパシリにするんじゃねぇ！」
「じゃあ、何が出来るの？ぶ・ちょ・う・さ・ん？」
「うぐ・・・・勝ったと思うなよ・・・・・・。」
「はいはい、そんなこと言ってないで買ってくる、以上。」
浅野め・・・・覚えてろよ。
と俺が席を立とうとしたとき、

「あ、俺の分も買ってきて、部長ですよね？」
「部長！悪いけど、俺の分もよろしく～。」
こいつら、俺を部長だと思ってねぇ・・・・。
そうは思いつつも飲み物を買うために部室から出た。

「まったく、あいつらは部長をこんな風に使いやがって。絶対に見返してやる。」と言いながらも俺はあいつらの飲み物を買っていた。この学校の自販機は飲み物の種類が多く、普通の飲み物から、一リットルの飲み物、さらにはおでん缶とかも売っている。

ちなみに買った飲み物は、
浅野に『コーヒー牛乳（炭酸入り）』
巌に『緑茶（炭酸入り）』
井上に『コーラ（炭酸抜き）』
そして俺は『イチゴ牛乳（普通）』

何？なんで、コーヒー牛乳や緑茶に炭酸が入ってて、コーラに炭酸が無いのか？

それは、この自販機の中身を入れてる業者に聞け。

さて、買い終わったし部室に戻るかと思った時だった。

「あなた、白川昇よね？」

女性の声がした。

俺はビクッとしながらも後ろを見るとそこには夏にも関わらず、暖かそうな服装をしている金髪の女性だった。

そして俺は見た瞬間にある1人の女性を連想した。

「おい、嘘だろ・・・。」

今、俺の目の前にいる女性は俺が連想した女性『八雲紫』にそっくりだった。

「もう一度聞くわ。あなたは白川昇なの？」

今度は苛立ちが混じった声で言ってきた。

「は、はい！！お、俺が白川昇です！」
とビビりつつもなんとか返事をした。

「そう、あなたが白川昇でいいのね。なら、突然だけど、貴方と『貴方の友人』を幻想郷へご招待するわ。」

へぇ～、幻想郷に招待ね・・・・・・え！？
「ちょ！？待って「じゃあ、楽しんでいってね。」えぇーーーーー！？」

説明をしてもらう前に俺は紫さんが作ったスキマに落ちていった。

「フフフ・・・・さて、あなた達は一体幻想郷で何をしてくれるのかしら。楽しみだわ。」
独り言を言いながら紫さんもスキマに消えていった。

第2話　リア充って、日常生活を楽しく生きている奴のことを言うんじゃないの

どうも、皆様お久しぶりです。

バリカタ愛好者です。

投稿が遅すぎて申し訳ないです。

作者自身、『早く投稿しなきゃ！！』という思いはあったのですが、なかなか文章が思いつかず、友人達に手伝ってもらってやっと投稿しました。

でも、見れば見るほど駄文ですね・・・・。

手伝ってくれた友人達に申し訳ないと思っています。

こんなダメダメな駄文ですがこれからもよろしくお願いします！

以上、ＴＲＰＧにハマっているバリカタ愛好者でした。

第3話　え！？　ルービックキューブって分解するものじゃないの！？（前半）

最初に言っておきます。

駄文です！！　ごめんなさい！！

ではどうぞ！！

第3話　え！？　ルービックキューブって分解するものじゃないの！？（前半）

やあ、みんな元気？

俺は白川昇。

どこにでもいる『普通の高校生』だ。

え？　今何をしているかって？

今、俺は・・・・

「まてー！　アタイとしょうぶしなさい！」

「まてー、美味しい人間ー。」

ルーミアと？（チルノ）に追いかけられていた。
何故、こうなったのか。
それは今からすこし前まで遡る・・・・

「くぅ～～、いってぇ～～。」

俺は尻餅をついていた。
尻餅をつきながら周りを確認すると、そこには森が広がっていた。
「おいおい・・・・ここどこだよ・・・・・。」
確か、俺はいつも通りに学校に居て、いつも通りにあいつらの飲み物を買って・・・・・

そうだ！　戻ろうとしたときに紫さんに出会って、そのままスキマに落とされたんだよな・・・・・。
証拠に地面に飲み物が落ちてるし・・・・・・・・炭酸、ダメだろうな。

ともかく、ここがどこだか分からないからとにかく場所を特定したい。
でも、ここが本当に幻想郷なら・・・・・・

「たぶん・・・・・居るよな、妖怪とか・・・・・・・。」

こういう時って、結構な確率で誰かに会うんだよな。
でも、こんなところでじっとしてるほうが危ないよな・・・・。

「よし！　探索でもするか。日もまだ高いし、妖怪が出るとは限らないしな。」

俺は落ちている飲み物を全部ポケットに入れると、森の中を進み始めた。

『数十分後』

「だあ〜〜〜〜〜。いつまで続くんだよ〜〜〜〜〜。」

歩いても歩いても、森ばっかりだと思わず言いたくなるもんである。

さらに、森の湿気があるから肌にシャツがくっつき、気持ち悪い。

そんな不快感と早く森を出たいという思いが合わさり、俺はイライラしていた。

そして、決定的なミスをしてしまう。

「ぬぁ〜〜〜！！

誰か居ないのかーーー！！」

「誰も居ないのだー。」
「そっか、誰も居ないのかー・・・・・・

・・・・え！？」
俺は声のした方を見るとそこには金髪の少女がいた。

それを見た俺の脳ミソは瞬間的に1人の名前を導き出す。

『常闇の妖怪　　ルーミア』

「あなたは食べてもいい人類？」

・・・・うん、冷静に考えよう。
この後どうなるかを・・・・・・。
ルーミアと出会った→食われる→抵抗する→抵抗失敗→ＴＨｅ　ＥＮＤ・・・・・。

あれ？　このままじゃ、死ぬ？

「おーい、聞いているのかー？」

いや、待て何かあるはずだ・・・・この状況を打開する手が。

「食べちゃうぞー？」

何かに気を反らせられれば・・・・勝機はある・・・・！

「う～ん、食べてもいいのかなー。」

でも、気をそらせた後はどうする？ただ逃げただけではいつかは追いつかれる・・・・。

パクっ

そうか！　ルーミアもある程度は話しが分かる子（？）だと思うし、説得するしかない！！

はむはむ

「よし！　ルーミア、話しを・・・・っておい！？」

気が付くとルーミアがいつの間にか俺の左手に噛みついていた。
だが、これといって痛いわけでもなく、どっちかというと生暖かい。
まさかの甘噛みであった。

「ちょ！？　何してんッスか！？」

「ん？」

「『ん？』じゃないよ！？　何で手に噛みついているの！？
しかも甘噛みーー！！」

「んーんんんー。」

「たぶん、今『そーなのかー』って言ったと思うけど、分かりにくいからとりあえず手を甘噛みするのやめてーー！！」

俺がそういうとルーミアはゆっくりと甘噛みをやめて俺の手を解放してくれた。

うわ・・・メッチャねっとりしてる・・・・。
所々に薄く歯形があるし、なんかすごいことになってる・・・・・。

「意外とおいしかったのだー。」

「いや、おいしいからって人の手を甘噛みし続ける人（？）はルーミアしかいないと思うよ。」

「そーなのかー。」

「そーなのだー。」
ルーミアって本当にこんな性格してるんだな・・・・。

ん？　そういえば、なんか話しが出来ている？
さっきは甘噛みされてたけど、普通だったら手首もっていかれてるよな・・・・。
ルーミアは人を食べる妖怪だったはず・・・・。

「ルーミア、何でさっき俺の手を食べなかったの？」

「ん？だって今はお腹いっぱいだから。」

「え？」
お腹いっぱい？

「だから、もう『ご飯』は食べたから。」

俺はこの何気ない『ご飯』という単語に寒気を感じた。

ご飯。
それは普通の人間ならば何も思わないが、

彼女は『妖怪』

妖怪にとってのご飯とは何か。

それは十中八九、『人間』である。

つまり、『妖怪』であるルーミアがお腹がいっぱいということは・・・・・

『人間』を食べたという事だ。

それを理解し終わった時、俺の顔にはほんのり冷や汗が浮いていた。

「どうしたのだー？」
ルーミアが笑顔のまま尋ねてくる。
「え・・・・いや、何でもないよ。」
とりあえず返事はしたが、何でもないわけがない。
実際俺の心臓は今までにないくらいバクバクいってるし、手汗もメッチャ出てる。
とにかく、ルーミアから逃げなきゃ。
そんなことが頭の中を埋め尽くしていた。
そのときルーミアが口を開いた。
「なあなあ、チルノを見てないかー？」
「チルノ？　チルノって、氷精の？」
「そーなのだー。」
「チルノは見てn・・・・いや、『見たよ。』」
俺は逃げるために、嘘をついた。
「ほんとーかー！！　で、どこで見たんだー？」
ルーミアが笑顔で聞いてくる。
普段なら可愛いとか思うだろうが、その時の俺にとっては恐怖にしか思えなかった。
「あっちの方で見たよ。」
と俺は右手の方角を指差しながら言った。

すると、ルーミアはその方向を一度見るとすぐにこちらに目線を戻して言った。

「ほんとーなのかー？」

「ほ、本当だって！！　もし、嘘ついていたら俺を食べても良いよ！！」

そういうとルーミアは納得したような顔をして

「そーなのかー。」

と言うと教えた方向に飛んでいった。

俺はルーミアが見えなくなるとその方角と逆の方角に全力で走り出した。

死に物狂いで走った。

途中何度か転んだが、走った。

そして、森を抜けた。

その瞬間、足が限界を迎え、俺は顔から地面にぶつけた。

俺は地面に顔をつけながら

「つ、疲れたーーー！！」

と腹から声を出した。

その時、上の方からポチャンと聞こえた。

顔だけをそちらの方向に向けると、そこには

「み、水？」

大量の水があった。
急に喉が渇いてきた。
全力で走っていたのだから当たり前だと思うが。

俺はほふく前進のように腕だけを使い、なんとか湖に近づくと、顔をそのまま湖に突っ込んだ。

ゴクッ　ゴクッ　ゴクッ

ゆっくりと湖から顔をあげる。

両腕を真上にあげながら膝立ちの体勢をとる。

そして、大きく息を吸いこむ。

「おいしいぞーーー！！」

そういうと俺はそのまま後ろに倒れた。

そして

「Ｚｚｚｚｚｚｚｚｚ……。」

寝てしまった。

……後半に続く。

第3話　え！？　ルービックキューブって分解するものじゃないの！？（前半）

みなさん久しぶりです。

バリカタ愛好者です。

ここ最近、ちょっと迷走していました。
スランプって言うか、単純に忙しかっただけだったんですけどね。

前回の投稿からかなりの時間が経ってしまいました。
もしかしたら前までの小説の書き方とは違うかもしれません。

それでも、良いと思われた方は感想などを残してくれるとありがたいです。

今度は投稿までに時間を掛けないようにするので応援よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0617x/

東方友人記

2012年1月6日20時50分発行